

## 南九州キリシタン遺跡巡礼の旅

7月12日思い立って鹿児島に向かった。これまでのキリシタン遺跡巡礼は全て自由に行動できる一人旅であったが今回は温泉に行きたいという友人が同行した。二人分の切符を用意して新大阪で落ち合い、7:15 発鹿児島中央行き(さくら)に乗った。11時半に到着、鹿児島もずいぶん近くなった。現役時代仕事で何回か鹿児島に来たが時間を有効に使うためいつも大阪発鹿児島行きの夜行バスを利用した。九州の高速道も未完成区間が多く、日本で一番乗車時間の長いバス路線だった。数年前に鹿児島を訪れた時は新幹線が鹿児島と八代間が開通した直後で西鹿児島駅が立派な鹿児島中央駅に生まれ変わっていて驚いた記憶がある。

**ザビエル滞鹿記念公園** 日本に初めてキリスト教をもたらしたフランシスコ・ザビエルが日本の地を踏んだのが鹿児島の祇園の洲と言われ(1549. 8. 15)、今そこにザビエル上陸記念碑が建つ。随伴者は二人、宣教師とほかにマラッカでザビエルと出会い、彼から洗礼を受けた安次郎という男である。一説には彼は枕崎?出身の漁師で殺人事件かなにかを犯してマレー半島まで逃亡していた。彼がザビエルに出会って日本のことを紹介したのであろう、それを聞いてザビエルは新布教地として日本行きを決意したと思われる。その頃日本はすでに有力商人たちが南蛮交易を盛んに行っており、平戸などにポルトガルの船も入っていた。彼ら一行は薩摩上陸後、すぐ布教許可を得るべく島津貴久と面談した。領主貴久との会見を誰が仲介したのか不明だが、島津氏も盛んに南蛮交易をおこなっていたからそのうちの有力商人が間に入ったのであろう。とにかく貴久の許可が下りて一ヶ月ほど滞在しその間100人ほどの信者が誕生したという。鹿児島でザビエルは一人の高僧と知り合い親しい仲になった。記録によれば「汝靈魂を信ずるや如何に」といった禅問答のような議論もしたという。彼はローマへの書簡に「かくして神は我々のあこがれの国日本にお導きくださり、1549年8月聖母祝日の15日に到着しました。日本は聖なる信仰を大きく広げる極めてよく整えられた素晴らしい国です」と書きおけている。おそらく彼の眼にはアジアではもっとも先進的かつ礼儀正しい美しい国に映ったのであろう。そして日本全体への布教を目指して天子すなわち天皇に許可を得るべく上京を決意する。その前にポルトガル船で託送を依頼していた荷物や手紙を受けとり平戸に出向き、再び薩摩にもどり海路で京都に向かった。しかしそこでは予想もしなかった僧侶たちの激しい抵抗や戦乱によって天皇との会見もかなわず山口の大内氏を頼って西下、大内氏から手厚い保護を受け多くの人々が受洗した。その後大分の太田宗麟に招かれキリシタン大名誕生のきっかけとなった。日本に2年滞在后中国への布教を目指し、準備のためいったんゴアにもとり、中国上陸をうかがう途中上川島にて発病、中国上陸を果たせぬまま天国に召された。

前置きが長くなったが、鹿児島中央駅に着いてすぐタクシーでザビエル教会に向かう。カトリックの教会とは思えないモダンなデザインの建物である。1999年9月、ザビエル渡来450周年を記念して建て替えられた。ここにはザビエルの遺骨の一部が分骨されている。内部を信者のボランティアが詳細に案内してくれる。山口のザビエル記念聖堂とともに一度は訪れてほしいカテドラルである。道を隔ててザビエル滞鹿記念碑(下のザビエル像)公園になっている。



タクシーをひらって駅にもどり、JR九州自慢のしゃれた特急「はやとの風」に乗る。数年前、妙見温泉



に行ったときにも吉松から乗車したが、今回は逆コースで栗野駅まで乗る。途中木造駅舎としては日本一古い駅舎が二つあり(嘉例川

と大隅横川)、それぞれ5分づつ停車するので降りて見物したり写真も撮れる。栗野から今晚泊まる栗野岳温泉南洲館まで迎えの車に乗る。20分ほど山深く入った硫黄臭がただよう一軒家、かつて西郷隆盛が3ヶ月湯治滞在したこともある古い温泉宿である。今も火山活

動を続けている硫黄山も近い。宿の裏山にも轟轟と噴気を上げる八幡地獄がある。贅沢に湧き出る温泉は pH2.3~2.8 の強い酸性で疑いなく上質温泉である。一週間も滞在すれば大抵の病気は治るかもしれない。客は我々以外に二人。尾張一宮からきたという中老年人、飛行機でくれば近いもんですよという。



もう一人は香港からの青年で日本の名城巡りに取りつかれて、九州から北海道まで日本 100 名城のほとんどを巡ってきたという。そのために日本語を必死に勉強したと言い、今や日本の一人旅はまったく不自由ないとのこと。そういえば昨年北海道の小樽の寿司屋で会ったタイのお嬢さん、寿司の食べ歩きにこって日本語を覚えたと言っていたのを思い出した。以前嬉野温泉で会った温泉めぐりが趣味だと言っていた韓国から来た二人の学生さんも日本語が達者だった。今頃趣味のために外国語をマスターするそんな覇気のある若者が日本にいるだろうか？ 夕方から天気が怪しくなってきた案の定翌朝から大雨になった。栗野駅まで車で送ってもらったか乗車予定の普通列車が不通。このままでは人吉に行けない。しかし幸いにも特急が次の吉松まで行く、そして吉松から人吉までバスが代行するとの情報が入った。なんでも特急に中国からのツアーが乗っていてその添乗員から人吉まで代行バスを出してほしいと JR に依頼が入ったという。たぶん彼らは鹿児島と霧島を巡って人吉から熊本へでる予定だったのであろう。観光バスでなく JR を利用したのは恐らく吉松—人吉間の日本でも屈指の車窓景観に加えて今や日本にここしかないループとスイッチバックのコラボ、そして人吉から熊本まで蒸気機関車も走っている。しかしこんな天候では天下の絶景も期待できず、中国からのお客には次の機会にというしかない。我々には彼ら様様でラッキーというほかない。

人吉城の石垣

国宝青井阿蘇神社

教会のクリスチャン灯籠と三角石碑

増水した球磨川



バスは人吉駅に無事到着。雨の中香港からの青年とタクシーで人吉城の歴史資料館に向かう。人吉城は日本 100 名城のひとつで青年の集印帳がまたひとつ埋まった。ここは相良氏の居城で今は石垣だけが残り、内部は公園になっている。最近、相良氏がクリスチャン大名だったという説が出て注目されている。過去の歴史に人吉にクリスチャンがいたとか殉教者が出たという確たる記録は見当たらない。新説を発表した原田正史氏によると、例えば 20 代藩主相良長每夫妻やその息子 21 代頼寛夫妻などの墓碑にもハート♡や◇ 卐◇の刻印が蓮華模様の中などに刻まれているという。仏画や墓碑に蓮華が描かれることは不通のことだが、♡や◇模様は古来日本にはなく南蛮渡来のマークではないか、表面では仏教徒を装いながら実はクリスチャンであることを密かに主張するものと解釈できるという(人吉教育委員会;ひとよし歴史研究)。そのころの九州、近くの八代にもクリスチャン大名や武士が多くいたから相良氏もクリスチャンだった可能性は十分考えられるという。長每の重臣で城内に邸宅のあった相良清兵衛の屋敷跡から四方が石壁に囲まれ、浅い湧水井戸がある地下室が見つかった。ほかにも頼寛の家臣の邸宅からも同じ構造の地下室が。このような閉塞的な地下室が城内から見つかった例は日本の城にはないと言われ、その用途は謎であるが室内の壁石の一つに♡マークが刻まれている。私も見たが自然的なものか人工的なものか私の眼には判然としなかったが、これも清兵衛らがクリスチャンだった証拠かもしれないと資料館の人は言う。資料館を出た後、香港の青年は城内を見て回るといってそこで別れ、我々は近くのカトリック人吉教会に立ち寄った。教会の庭に織部風クリスチャン灯籠と頂部が三角形の石碑がある。この石碑は遣欧使節の一人、千々石ミゲルの供養碑とされている。先が三角錐になった石碑を見たのは初めてである。原田氏はこの三角はノアの箱船を象徴するのではとしているそうだが、私はこじつけにすぎないと思っている。翌日回ったいくつかの墓地でも頂部が三角の石碑をいくつか見た。あえてクリスチャンとの関連をこじつけるなら、キリスト教では三位一体から 3 は聖数で三角も聖なる形



とされる。しかし私は他地域のキリシタン墓碑などにこのような先のとがった石碑を見たことがないので、これは人吉、球磨地方に特有の土俗的なものでキリシタンとは無関係ではと思うのだが如何だろうか。

### 人吉城主・相良氏について

ここで少し相良氏について紹介する。静岡県の大井川の川口近くに相良町という地名があることは昔から知っていた。そこ人吉がどう関係があるのか疑問がわいてインターネットで調べてみた。やはり人吉相良のルーツは静岡県(牧之原市)にあった。藤原氏の末裔で平氏の一門である。平氏滅亡後は源氏の配下となり、

都を離れ牧之原台地一帯を領する(相良の庄)郷土となった。しかしその一族が肥後球磨の多良木地方に移住。この移住には頼朝の怒りを買って左遷されたとも、あるいは地頭に任じられて西遷したとか判然としない。しかし次第に勢力を強めて時には肥後全体を領するほどになった。隣国の島津氏との間に境界争いは絶えず、ついに水俣での争いに敗れ島津氏の配下に入る。秀吉の時代になって秀吉の九州征伐が始まり、島津氏との戦いに備えて秀吉が八代に遠征してきたとき、相良氏は島津氏の先兵として秀吉軍に抵抗したが利あらずと悟り秀吉に降伏。秀吉から八代などを取り上げられたが人吉・球磨の領地は安堵された。その後島津氏が秀吉に屈服して薩摩をそのまま安堵されたが、島津征伐が秀吉の九州遠征の主目的だったのに島津に対する処罰がほとんどなかったことは相良氏がうまく仲裁に入った可能性が考えられる。九州征伐後一時佐々成政が肥後に入ったが、一揆対策の失策によって改易されたため、秀吉は子飼いの加藤清正を北肥後の領主に、南肥後には小西行長を投入した。行長はキリシタン大名であったから宣教師による布教活動が活発に行われ、宇土、八代をはじめ行長の領地には3万人とも言われる多くのキリシタンが誕生した。そういうことを考えると人吉のような山奥にもキリスト教が伝わっていったとしても不思議ではない。秀吉の死後、関ヶ原の戦いでは相良氏は初め石田方についたが形勢不利とみるや? 小早川のように素早く徳川方に転じたため領地没収は免れた。最後まで石田方についた小西行長らは捉えられて斬首、岡山の宇喜多秀家は薩摩に逃げて命は助かったが彼の奥方が前田家の姫君だったこともあり、助命嘆願の末八丈島に遠流の身となっている。相良氏がもし最後まで西軍についていたら取り潰されていたであろう。島津氏も途中で引き返して助かっている。なお石田三成と仲が悪かった加藤清正は徳川方についたため肥後の領地は安堵された。相良氏が鎌倉から明治まで約700年間転封もなく球磨・人吉の領主として存続しえたのは極めて稀有なことで隣の島津氏も含め相良氏のような例は数えるほどしかない。

### 人吉にもキリシタンはいた?!

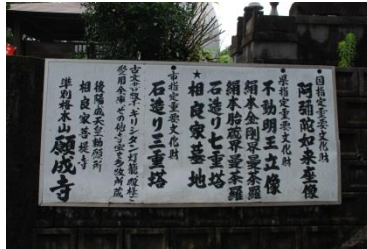
昨年南九州のキリシタンについてネットで調べていたところ人吉にもキリシタン遺跡があるとの話を知り、人吉市の観光産業課に電話して聞いてみた。担当者はキリシタンのことはよくわからない、最近人吉温泉旅館の女将の会(さくら会)が観光用のキリシタン遺跡マップを作成したから、会長の人吉旅館の女将に聞いてみたら何か参考になるかもと教えてくれた。さっそく人吉旅館に電話してその資料を送ってほしいとお願いしたら後日女将(堀尾里美氏)から丁寧な手紙とともに女将会が作ったマップを送って下さった。ぜひうちに泊まってキリシタンの話をしませんかとあった。そのマップには女将らが勉強し歩いて調査したキリシタン関連遺跡がいろいろ紹介されていた。すぐにでも出かけたかったが体調不良で動けず、今春の熊本地震もあってようやく7月になって今回の訪問となった。人吉旅館は球磨川を背にして国宝青井阿蘇神社の前にある古い旅館である。客室の窓から目の前に球磨川が見える。梅雨末期の豪雨で球磨川が決壊するのではないかと心配



赤子を抱く観音さん



蓮華模様の下に◇マークがある石碑



願成寺の城主の墓地の灯籠、◇の中に三角の○穴がある



になるほど流量が増していく。とりあえず温泉に入って雨でぬれた体を温める。人吉の温泉は盆地でかつ町中の温泉にしては湧出量が多く掛け流しである。pH8 のぬるっとした肌がスベスベする美人の湯である。広い浴槽の中に木製の腰掛があつて楽である。温度も丁度良くゆっくり長湯できる。翌朝になつても雨は止まず、JR は動かず今日中に八代に行けるかどうか。出発を遅らしロビーで女将からいろいろ人吉のキリシタンについて話を聞く。私の来訪の目的をよく覚えておいてくれて、これから車でキリシタン関連の遺跡を案内してあげるとのこと。願つてもない話である。遺跡の調査は彼女が中心になつて実施したそうである。実は彼女は韓国人でここの若主人と出合つてこの旅館を継ぐことになつたとのこと、古い旅館の女将など日本人でも大変なのによく頑張つて苦労したことだろう。秀吉の朝鮮出兵で拉致どうように球磨地方にも連れてこられた韓国人の慰霊碑を建て保存に努めている由であつた。

人吉に沢山あるお寺にキリスト教との関連を思わせる遺物が多くあるという。まず最初に行つた旅館の近くのお寺に赤子を抱いた石仏(観音)がある。またそこから少し先の観音院には花菱クロスの飾りのある小さな木造の女性観音像(所謂マリア観音)が安置されている由だが、当日は住職不在で実物は拝観できなかった。その他の寺の境内や墓地にもキリシタン灯籠と見られるものがいくつかある。最後に相良家の菩提寺である願成寺を案内してもらつた。灯籠の火袋にダイヤ型や三日月型の穴、三つの〇穴を三角にあけたものなど他所では見られない独特の灯籠が多く建っている。これらの灯籠や墓碑などからキリシタンと関係の深い人たちが相良家にいたと地元では考えられているが、もしそうなら宣教師による何らかの記録や手紙がスペインやローマなどに残っていてしかるべきと思うが本当にそのような証拠品はないのであろうか。相良氏がキリシタンだつたかどうかは別として、人吉に表面的には仏教徒を装つてカモフラージュしていたキリシタンがいたであろうことは否定しない。人吉に殉教者の記録がないのは領主の手厚い庇護によるのだろうと原田氏は書いているが、役人による調査がここまでは至らなかつた可能性もある。

そのあと一旦駅に戻つたが JR は依然として動きそうにない。九州自動車道の熊本行き高速バスが動いているという情報を女将が調べてくれて人吉 IC のバス停まで送つてもらつた。また八代 IC からタクシーを呼ぶよう手配までしていただき、大変お世話になつたことへのお礼を言つて別れた。女将がいなかつたら遺跡も巡れず、人吉で立ち往生していたかもしれない。無事八代に着いたときはすっかり雨も上がり、今朝ほどまでの豪雨も嘘のように青空が広がつていた。迎えのタクシーに乗り、麦島城跡のキリシタン殉教公園に向かつた。

**八代について** 八代といえば八代亜紀、八代の観光大使として活躍しているが、八代は古くから球磨川の河口に開けた水運の町である。その港としての機能は今も変わらず大企業が並ぶ工業都市として発展してきた。熊本港には入れない大型クルーズ船も横付けされ、外国観光客は八代を見ずに阿蘇や熊本城に直行するため八代に金が落ちないとタクシー運転手が嘆いていた。秀吉や徳川幕府は八代の水運・水利に注目、特に家康は島津の動静監視の拠点として重視した。幕府が一国一城制(領国内で大名が持てる城は一つのみ)を発布したとき、肥後の熊本藩だけは例外として熊本と八代に二つの城を認められていたことは彼らが如何に地理的、経済的重要性を認識していたかを物語る。それ以前の八代の城は小西行長が築いた球磨川の河口の麦島にあり麦島城と呼ばれた。関ヶ原の戦いで行長が斬首されると熊本城主加藤清正はただちに行長の領地を占領、重臣の加藤正方を城代として麦島城を管理させた。ところが 1619 年の肥後大地震で麦島城が倒壊した。なにしろ球磨川は日本有数の断層地帯で今回の熊本地震でも影響している。城が倒壊したので熊本城の第 2 代藩主であつた清正の息子・忠広が幕府に申し出て、麦島を放棄し少し離れた松江村に新しく築城、松江城すなわち今の八代城に移転した。清正が亡くなると幕府は熊本藩の肥後一国を没収し、城主・忠広を羽前鶴岡の庄内藩主・酒井氏おあずけの身とした。ただし 56 万石の大大名がいきなり無石というものなんなので鶴岡市内の丸岡というところに大名としては最低の 1 万石を与えて表向きの丸岡藩主にした。城も領地もない名ばかりの藩主で、引き受けた酒井氏は気の毒に思つて少なからぬ援助を忠広にしていたという。ともかく幕府は豊臣子飼いの外様大名の殲滅をこのような血も涙もないやり方で実行したのである。丸岡藩は忠弘一代で消滅、残つた藩士



は庄内藩に引き取られたが乱心・自害して果てた者も何人かいたようである。加藤氏の去った熊本城には 37 万石の小倉藩・細川氏が入城、八代には細川忠興(ガラツ夫人の夫)が 3 万石の隠居代をもらって住んだ。忠興亡き後、細川藩筆頭家老の松井氏(家光の直臣で幕府が派遣したお目付け家老と思われる)が八代藩主になり、島津藩の牽制と南蛮船の監視にあたった。確か松井氏は宮本武蔵の後見人でもある。

### 八代での殉教遺跡

加藤清正と小西行長は共に秀吉の部下ながら犬猿の仲だった。清正を武官とすれば行長は文官である。清正は熱心な日蓮宗信者、行長はキリシタン。清正は領内の日蓮宗以外を禁教にし、他宗の仏教徒やキリシタンに転宗を強制したという。行長が京都の三条河原で処刑された後、行長領の支配者となった清正は早速外国人宣教師の領外追放、一般キリシタンには改宗を迫り、拒否したキリシタンを次々と処刑した。当時の八代の城代・小西美作もキリシタンだったが薩摩に逃げ延びた。が残されたキリシタン武士とその家族たちは麦島城の近くで処刑された。私は八代インターからタクシーで麦島に直行、処刑地を示す十字架の建つ広場に向かった。処刑された遺体の遺骨の一部が長崎に送られ、宣教師によってマカオで埋葬されたという。マカオが中国に返還された 1995 年、その遺骨が日本に戻されたそうで、カトリック八代教会では毎年殉教者の慰霊祭を実施している。慰霊碑が教会の前庭に建てられている。一部の殉教者の名が碑に彫られているが 4~5 歳の子供も複数いる。裁判もなく一方的に死の宣告を受ける彼らの心の内はどんなにか悲痛なものであったろうか。しかしむしろ彼らは天国へ旅立つ歓びを胸にして十字架についたに違いない。私は会堂の椅子に座り「今日我々日本のクリスチャンが平安に過ごせるのも彼らの尊い殉教があつてこそ」としばし感謝の祈を捧げた。

教会から徒歩数分、立派な石垣をめぐらす現在の八代城がある。大手橋を渡ってすぐ神社があり、そう広くない城内は公園になっている。先の地震で崩れた石垣の補修が進行していた。明治の廃藩置県で八代城も二束三文で払い下げられたが、買主は建物は壊したものの石垣までは金がかかって壊せず石垣だけ残したまま市が引き取り公園に整備されたとのこと。城の後ろに壊されずに残った城主松井家の茶屋・松浜軒がある。国の重要建造物に指定されている。まだ松井家の末裔が住まいしているため邸内の見学は不可だが、茶屋のある立派な庭は一般公開されている。バスで新八代に出て新幹線で新大阪まで帰る。梅雨末期の豪雨に禍いされながらも予定の二泊三日の旅を無事終了できたのは幸いであった。

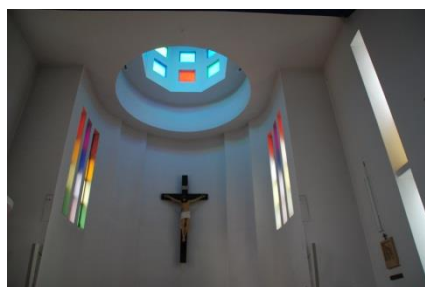


麦島城址に建てられた殉教地を示す十字架と由緒説明板



八代教会前庭の殉教記念碑

カトリック八代教会



松浜軒の庭園



八代城の石垣

